

自然に囲まれて働くのが喜び 生まれ育った札幌で農を育む

有明で4年前に新規就農し、
バッグ栽培でミニトマトを生産

記録的な大雪に見舞われた厳しい冬が終わり、春の陽気を感じられるようになった4月中旬、いまだ雪が解け残る清田区有明のハウスを訪ねた。豊平地区組合員の秋山祐亮さんは、2019年4月にこの地で新規就農し、現在はミニトマトを専作で生産する。

「この辺りは1年を通して市街地よりも気温が低いです。今年は大雪で

雪解けが遅れていたので心配していましたが、なんとか予定どおり始められそうです」

就農当初は3棟だったハウスも現在は7棟にまで増え、この夏にかけてさらに2棟の増設を予定している。畑に直接植え付ける方法ではなく、袋に入った土に苗を植えて育てるバッグ栽培という方法で生産しているのも秋山さんの農業の大きな特徴だ。これまでの「アイコ」や「プレミアムルビー」などの品種を生産してきたが、今年は食味、果色、着果性が特に優れていると

される「キャロルスター」という品種に挑戦する。

「バッグ栽培は土が完成されているので土による生育への影響が少ないのが利点です。今年はキャロルスターをメインに作付けしますが、その他の品種もいくつか試作してみるつもりです」

苗をバッグに植え付けてから50日前後で収穫の時期を迎え、少しずつ時期をずらして育てることで7月中旬から10月中旬頃まで出荷を行なう。

カー用品販売からの転身 施設栽培のミニトマトとの出会い

生まれ育った札幌で就農し、今年4年目のシーズンを迎える秋山さんが、子どもの頃から農業に触れた機会はほとんどなく、就農するまではカー

用品販売会社に勤めていた。

「会社勤めをする中で、完成された商品を販売するより、自分の作ったものを責任を持って売りたいと思うようになりました。クレーム対応などでストレスに感じることもあったので、自然に囲まれて働けるのも農業に魅力を感じた理由かなと思います」

農業公社からの紹介でむかわ町の農業法人で研修を積んだ後、地元・札幌での就農を目指し研修の場も札幌へ。偶然の出会いからJAさっぽろ青年部の前本部長で、ミニトマト生産者の平賀農さん（南地区組合員）が経営する株式会社風のがっこうでミニトマトの施設栽培を学ぶこととなった。

「同時期に農業を始めた友人に誘われて顔を出した会合に平賀さんもういらしていました。色々話を聞くうちに、研修させてください！とその場でお願いをしたのをよく覚えてます。札幌での就農なら露地で少量多品目かなと考えていたので、専作でミニトマトの施設栽培をしていることにすごく興味がわきました」

同社での研修を経て1年後、札幌市の仲介によって借りられる畑も決まり、秋山さんは念願の就農を果たした。



豊平地区組合員

秋山 祐亮さん

●あきやま ゆうすけ

昭和61年3月、札幌市生まれ

カー用品販売の会社員から一念発起。

2019年に就農したミニトマト生産者。

趣味は日本酒を嗜むこと。